

79巻2号

2024年4月1日

YAA 天文会報

(4~6月号)

800号

〒226-0016

横浜市緑区霧が丘 4-1-7-402

正木 仁 方

Mail: masaki@e08.itscom.net

HP: <http://home.n03.itscom.net/yaa/index.html>

横浜天文研究会



M81/M82

撮影：山形幹夫

祝 YAA 天文会報 800 号

YAA 天文会報は、1946 年 10 月に第 1 号が発行されてから 77 年余の時を経て、通算 800 号となりました。

現在の会報の執筆者より、800 号へ寄せてのメッセージをいただきました。

「アナログからデジタルへ」

相原 榮

YAA 会報、800 号達成オメデトウ御座います。故前川会長が手作りで毎月発行していた時代は、ガリ版印刷の時代。鉄筆を使った手書き原稿を、謄写版にセットしローラーにインクを浸けて一枚ずつ刷る手作業でした。教師だった前川先生には手慣れた事だったでしょう、毎月の原稿も殆ど前川会長が作成していました。会報の作成だけでなく郵送のための宛名書き、記念切手を（指を舐めながら）1枚ずつ貼るなど大変な作業を毎月続けられたのですから、その努力と情熱は驚異的でした。

しかしながら御高齢となり、さすがに発行も大変な状況になって来ました。そんな時に少しでもお手伝い出来ないかと、会員有志の方々と共同で会報の発行をお引き受ける事にしました。毎月我が家に集まってもらい、持ち寄った原稿を会報の形に編集。紙と糊を使ってのアナログな作業で、美しく仕上げるために色々なコツがある事も知りました。勿論この頃は謄写版ではなく、単価の安い店でコピーし発送も分担していました。

前川会長亡き後の現在、会報の編集はデジタルの時代になり、原稿のやり取りは電子メール、編集は事務局の正木さんがパソコンで行い、完成後はホームページで公開するスタイルになりました。また発行頻度も3か月に1回（年4回）となりました。

会員の高齢化も進み、以前のように例会や市民観望会・合宿の観測会なども困難な状況ですが、会のコミュニケーション手段として今後も続いて欲しいと考えています。

最後になりますが800号の重さはトンデモナイものです、単純に12か月で割ると67年、今の年4回で行くと900号は25年後になります。どこまで続くのやら…。

YAA 天文会報 800号に寄せて

横山好廣

YAA 天文会報 800号をお祝いたします。

1946年、故前川会長の手による第1号を皮切りに、幾多の困難を乗り越えて到達した800号であると思います。この積み重ねられた稀有な数字を一会員として素直に喜び、偉業を誇りに思います。

小生にとって YAA 天文会報は天文民俗調査に関する稿を発表する場として大変有難いです。振り返れば、391号（1979年10月号）に「飛島の星」を載せて頂いたのが最初でした。その頃、前川会長には天文民俗に関する分野でオリジナリティを出すことの難しさを教えられ、励まされたことを思い出します。それは、YAA が発足時に YAA の顧問であった野尻抱影氏の『日本星名辞典』を始め多くの著作を念頭に置かれてのアドバイスであったのではないかと回想しています。しかし、気がつけば45年も経過しました。未だオリジナリティは不十分ですが、これからも紙面をお借りして調査報告を続けたいと思っています。拙文の程はご容赦願います。

末文になりました。会報の発行を続けておられる事務局（正木氏）の労に感謝申し上げます、小文を終わります。

天文会報作成を引き継いで

正木 仁

本会を立ち上げ60年以上会の活動を牽引されてきた前川会長が2010年に亡くなり、会員の皆さまのご協力をいただきながら会報の作成を引き継ぎました。その後2016年10月発行の770号にて紙ベースの会報作成・発送にピリオドを打ち、翌2017年1月よりYAAのホームページを開設、天文会報もそこで公開するようになりました。そのおかげでページ数に縛られることなく（従来はB4横用紙2枚中折り両面プリント8ページ固定）その時その時の原稿量に応じてフレキシブルに作成できるようになり、作業が非常に楽になりました。といっても自分担当の観望ガイド、たったの1ページに毎回手こずっていますが…私も確実に年齢を重ねていくなか、どこまで継続できるか予想もできませんが、今後のことも考えつつ、引き続き皆さまのご協力をよろしく願いいたします。

観望ガイド

正本

今年桜の開花が例年より遅れました。そのおかげで“入学式には桜の花”という図式が叶いそうです。これから4月は気温が高めとの予報が出ています。夏の訪れも早いのでしょうか…。

まず4月の天象ですが、7日の明けの空で月齢27.4の細い月の両隣に金星・土星・火星が集まっています。日の出の時刻も早くなってきましたが、お天気が良さそうなら早起きしてみましょう。

21日に周期彗星の12P/ポン・ブルックス彗星が近日点を通過、日没後の西北西～西空の低空、中旬には4等級の明るさで見ることができるとは思いますが、まだ薄明の残っている時間帯になりますから肉眼では難しいと思いますが、双眼鏡を使えば見ることができそうです。月初めはおひつじ座、その後おうし座へ移動していきます。13日前後は木星の下側を通過していきます。

5月は、5日・こどもの日の昼間に火星食があります。月齢26.4の月に1.2等の火星が東京では12時11分に潜入が始まります。日中の現象ですから、天体望遠鏡や双眼鏡で観察する際は、太陽が近くにありますが、太陽を絶対に直接見ることを避けよう十分注意してください。

6日にみずがめ座η流星群が日本時間の6時ごろに極大になります。10月のオリオン座流星群とともにハレー彗星を母天体とすることで知られています。日本では放射点が南天に低いため出現数は多くはないですが、速度が速く長経路の流星が多いのが特徴で、4月末からの大型連休をとおしてみる事ができます。南半球では活発に出現する流星群として知られています。

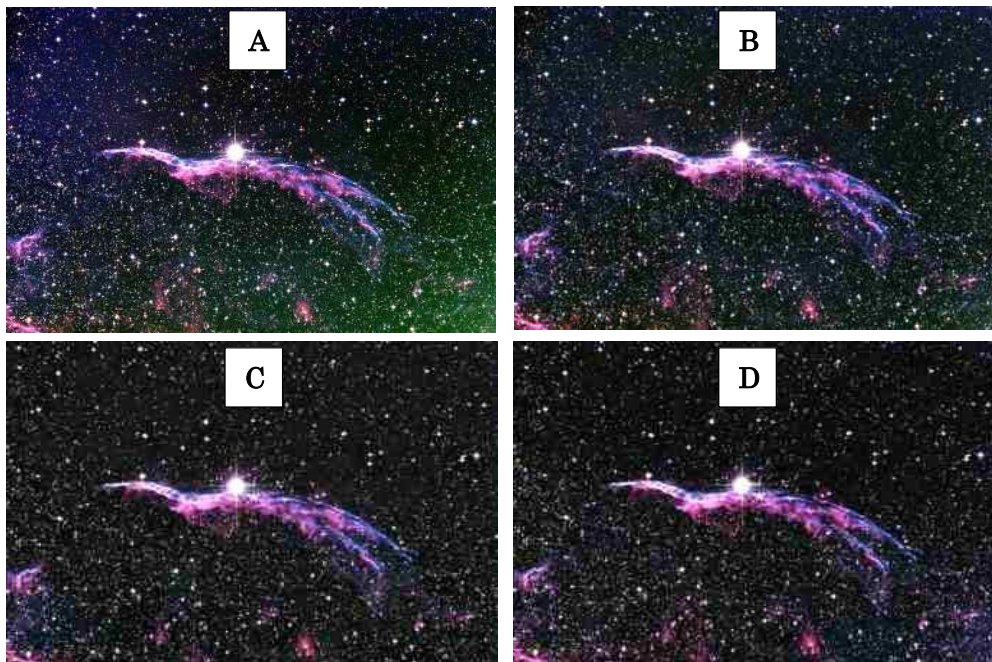
10日に水星が明けの東天で西方最大離角になりますが、6月4日に外合となる金星より高く見えています。

6月になると入梅、梅雨時の晴れ間は貴重になります。その中では、5日の夜明け前の東北東の空低いところで水星と木星が接近し、その上に新月間近の月齢27.7の月があり、眺めても美しくカメラの良い被写体にもなります。

14日22時33分、おとめ座β星（3.6等）が月齢8.1の月に隠される星食（時刻は東京・潜入）があります。また20日18時47分、さそり座のアンタレス（1.1等）が月齢13.9の東天から昇ってきたばかりの月に隠され、出現は18時56分（時刻は東京）です。まだ太陽は沈んでいませんが見つかりやすいと思います。惑星食・星食は動画で撮影できると見るだけでも面白い記録になります。その際、カメラの時刻は正確に設定してください。

しばらく明けの明星であった金星が4日に外合となり、昨年8月以来夕空へ戻ってきます。

800号おめでとうございます。小生の初登場は1975年344号でした。長い時が流れました。当時の前川会長の記事を読み返すと現在も社会問題となっている内容の記事があり、なんと先進的でリベラルな方であったかと思ひ返します。

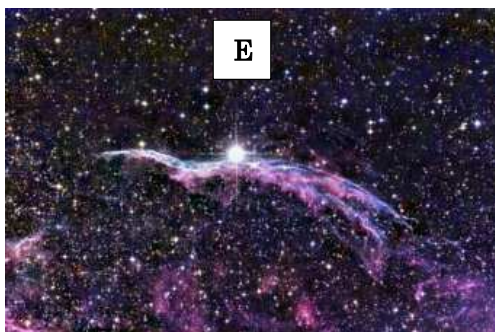


前号でフラット補正がうまくいかない悩みをお知らせしました。幾つかのソフトを試してみた結果の紹介です。BとCは観測所仲間に処理を依頼した。上記の画像は794号表紙の網状星雲NGC6960魔女のほうきです。794号の画像はAを正方形にトリミングしたものです。理由はAは右下の部分が明るく背景の明るさを平坦にできていません。ステライメージでは平坦にできなかつた。

B : FlatAidePro/日本製・有償でAを修正したもの。右下は少し明るい。

C : GrandientXTerminator (GXT)/海外製・有償でAを修正したもの。GXTはPhotoShopにプラグインして使用する。現在最も秀逸と思われる。

D : GraXpert/海外製・無償でAを修正したもの。Bより有効と判断。



URL: <https://www.graxpert.com/> からダウンロード。単独で動作する。

E : Dを仕上げた完成形。

【表紙写真】M81, M82 784号4ページに掲載した画像をGraXpertで背景ムラを修正、仕上げた。ノイズが見えるが、これもAIを使用した有償ソフトで処理すれば改善可能。(次号予定)

日月星の伝承を訪ねて (79)

横山好廣

津久井の月待塔 ②

前回に続き城山ダム建設のために移転した2基の二十三夜塔(1)・(2)を報告する。なお、二十三夜塔(2)は次回の報告とする。

水没地区 →

『津久井町ダム史』

P. 97 から転載



●二十三夜塔(1)

調査年月日 平成 26 年(2014)8 月 3 日

同 8 月 5 日

調査地 相模原市緑区二本松 3-14-14

二本松八幡社

旧所在地(水没) 旧津久井郡津久井町太井
字荒川 荒川八幡宮裏

名称 二十三夜塔

形式 自然板石碑・文字塔

法量 塔身 90(地上部)×80×8

台石 埋込

銘文 正面 廿三夜

背面 天保十一年(1840)

正月吉日 當村講中



二十三夜塔(1)

*水没——城山ダム建設でできた津久井湖の湖底に水没したこと。

本碑は、ごく普通の二十三夜塔だ。しかし、この二十三夜塔は、城山ダム建設に伴い、二本松に太井・荒川地区の鎮守・荒川八幡宮を移転・遷座させたときに、八幡宮裏の大樫の根元から移転させた石仏群の中のの一つである。荒川八幡宮は昭和 37 年(1962)11 月、遷座され、二本松八幡社と改まり今日に至っている(八幡社境内「由来板」・『湖底のふるさと 荒川』)。

「廿三夜塔」の造立年月は天保十一年正月で、天保十一年十二月には太井村の小前 45 名が代官所に夫食・種代等の返納延期を願う文書を出さざるを得ない状況にあったことを考え併せると(『津久井町史』資料編 近世 2)、未だ天保の飢饉の影響の残っている頃に本碑は建てられたことになる。飢饉の影響下に

あって、二十三夜塔を建てたエネルギー、逞しさに感心する。二十三夜に何を祈願したのか不明であるが、それは村の安寧・五穀豊穰・水運繁盛等であろうか。兎に角、二十三夜待が造塔を促したことは間違いない。

実際に二十三夜塔造立の運びとなるには、篤い信仰心や村人の団結力の他に造塔を支える何らかの経済的な背景もあったのではと想像する。それは何なのか、解明することは小生の力の及ぶところではない。漆、養蚕や舟運（筏乗り・高瀬舟）、川漁等からの現金収入を考えたが、甚だ浅薄の限りだ。



銘文「當村講中」の當村とは、太井村の荒川組のことである。荒川組は古絵図には蛸のように描かれ地形的にも纏まりが良さそうで、相模川は集落を迂回している。荒川組は相模川舟運の基点で、筏場、渡船場、荒川番所（五分一運上取立番所）などが設けられ、物資の流通が盛んで太井村の行政の中心地として、大層な賑わい振りを想像した（『新編相模国風土記稿』、『津久井町史』通史

太井村絵図 角田昌保氏寄贈
津久井湖記念館蔵

編近世・近代・現代、『ふるさと津井』第3号)。

なお、移転された石仏群の中で本碑の造立年は新しい方である。このことは、二十三夜待が荒川地区に浸透した時期が、日待や庚申待よりも遅かったことを意味する。二十三夜待が日待・庚申待に取って代わったのか？習合化されたのか？不明だ。因みに、石仏群で造立年が判明している石造物は以下の通り。

- | | | |
|-----------|---------------|---------------------------|
| 1. 日待塔 | 貞享 3 年(1686) | 日待講中 |
| 2. 庚申塔 | 安永 7 年(1778) | 施主不明 |
| 3. 水神等 | 天明 7 年(1787) | (荒川船) 筏乗講中 (『津久井町郷土誌』で補足) |
| 4. 観世音菩薩塔 | 文化 8 年(1811) | 施主不明 |
| 5. 地藏菩薩坐像 | 文政 11 年(1828) | 念仏講中 |
| 6. 二十三夜塔 | 天保 11 年(1840) | 當村講中 |
| 7. 萬靈供養塔 | 嘉永元年(1848) | 當所 |
| 8. 妙法観世音塔 | 明治 17 年(1884) | 太井村 八木鉄造 |

水没世帯の移転や八幡宮の移転・遷座と同時に、これだけの石造物を移転させることは大変なことである。しかし、長年にわたって人々の心の拠り所であった石造物を新天地に運ぶことは自然な心情で、納得のいくことであったと考える。

上記の石仏では日待塔に注目した。荒川地区の近くで確認した日待塔は、近

隣の二十三夜塔よりも古いだけでなく、分布密度も濃いというのがその理由であるが、その考察は課題だ。

加えて、筏乗講中が施主の石造物（水神塔）は珍しい。荒川は小筏を大筏に組みなおす場所であったので、水神塔は筏乗り・水運が盛んであったことの証しであろう（『津久井町郷土誌』）。



二本松八幡社の石仏群

昭和 37 年(1962)、津久井町太井の荒川地区・116 戸（全水没世帯の約 4 割）の多くは相模原市緑区二本松に移転した。また、泉蔵寺・寿性院の檀徒多数も移転を余儀なくされ相模原市緑区大島に大蔵寺別院を設けた。水没世帯は移転を余儀なくされ、神社移転、寺院建設、石仏群移転等と激変の状況であったと想像に難くない（『津久井町ダム史』）。

県が用意した移転代替地は数か所あったが、なかでも二本松地域は最大の集団移転地で荒川・三井・中沢・沼本の人々が移転した。当初、一面の野原で風が吹くと埃の舞う地であった二本松地区の世帯数は昭和 37 年に 130 戸(水没世帯の 6 割)であったが、昭和 60 年には 1600 戸と大発展を遂げているのには驚く。移転した人々の前向きの姿勢を感じさせる数字である（『津久井町ダム史』、『相模川歴史ウオーク』）。

昭和 37 年 11 月 16 日、相模原市の体育館で歓迎会が行われ、歓迎の碑も建ち、受け入れ側の誠意を感じる。しかし、長年住み慣れた自然の恵み豊かな先祖伝来の地を去らざるを得ない人々の気持ちを思うと余りある。

終わりに、昭和 37 年(1962)5 月 13 日、荒川部落の解散式での部落運営委員長の角田昌保氏の挨拶を引用し結びとする。

「部落の八幡様は七百六十年前に建立されたと伝えられているから、祖先はそれ以前からこの地に住み、喜びも悲しみも相模川の流れとともにこの美しい郷土を守り伝えてきたわけです。いまここに県民の公共福祉のため、若葉に包まれた故郷を去ることは耐え難い思いですが、どうぞ皆さん第二の人生をしっかりと建設してゆきましょう」（『津久井湖誕生』）。

この大きな犠牲を伴った大決断を一横浜市民として肝に銘じておきたい。

本稿は、津久井湖記念館の市川館長から示唆に富んだアドバイスを頂き、記念館内の展示資料にも啓発されて成りました。ご厚意有難うございました。

天象

相原 榮

4月

水星: 月初は夕方の西天、後半は明け方の東天 +0.5~+5.3~+1.1等 うお座
金星: 明け方の東天低空、中旬以降は観望困難 -3.9等 うお→くじら→うお座
火星: 明け方の南東天 +1.1等 みずがめ→うお座
木星: 夕方の西天、宵に沈む -2.0等 おひつじ座
土星: 未明の東天に昇る +1.1~+1.2等 みずがめ座

2日 12h15m 半月(下弦)

4日 16h02m 清明

9日 03h21m 新月

11日 宵の西天で月がプレアデス星団(M45)に接近

16日 04h13m 半月(上弦)

宵の天頂付近で月がプレセペ星団(M44)に接近

19日 23h00m 穀雨

21日 夕方の西天低空で木星が天王星に大接近

22日 深夜こと座流星群が極大の頃(月の光で悪条件)

24日 08h49m 満月

5月

水星: 明け方の東天 +1.1~-0.7等 うお→おひつじ座
金星: 明け方の東北東天で高度を下げる、後半は太陽方向 -3.9等 おひつじ→おうし座
火星: 未明の東天に昇る +1.2~+1.1等 うお座
木星: 月初は夕の西天~太陽方向~月末は明けの東天 -2.0等 おうし座
土星: 夜半過ぎ東南東天に昇る +1.2~+1.1等 みずがめ座

1日 20h27m 半月(下弦)

4日 未明の東天で月と土星が並ぶ

5日 09h10m 立夏

12h11m 西南西天で白昼の火星食

6日 06h みずがめ座η流星群が極大の頃(好条件)

8日 12h22m 新月

15日 20h48m 半月(上弦)

20日 22h00m 小満

23日 22h53m 満月

31日 02h13m 半月(下弦)

6月

水星: 明け方の東北東天、後半は夕方の西北西天 -0.7~-2.2~-0.9等 おうし→ふたご座
金星: 太陽方向~夕の西天、太陽に近く観望困難 -3.9等 おうし→ふたご座
火星: 夜半過ぎに昇る +1.1~+1.0等 うお→おひつじ座
木星: 未明の東天に昇る -2.0等 おうし座
土星: 夜半に昇る -1.1~-1.0等 みずがめ座

4日 明け方の東天低空で水星と木星が大接近

5日 13h10m 芒種

6日 21h38m 新月

14日 14h18m 半月(上弦)

20日 18h47m 日没前の東天でアンタレス食

21日 05h51m 夏至

22日 10h08m 満月

27日 14h 6月うしかい座流星群が極大の頃

28日 未明の天頂付近で月が土星に大接近

29日 06h53m 半月(下弦)